京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成29年3月18日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局　教育学研究科
職　　名　教 授
氏　　名　鈴 木 晶 子

助成の種類	**平成29年度　・　国際会議開催助成**	
国際会議名	「もう一つの知」に関する歴史人類学国際会議 ―現代における身体知・暗黙知・智恵の可能性	
開催期間	平成 29年 2月18日　～　平成 29年 2月 19日	
開催場所	京都大学教育学研究科本部棟　第一会議室	
参加者	総 数 57 名	内 訳 国外　10名 国内　47名
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　□ 無　■ 有（会議プログラム）**	
会計報告	事業に要した経費総額	1,681,228 円
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 教育学研究科運営費、京都文化交流コンベンションビューロー 小規模MICE開催支援助成金、日本学術振興会科研費

経費の内訳と助成金の使途について

費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
旅費交通費	1,011,630	591,491
会場・会議費	34,560	34,560
謝金	243,400	169,881
消耗品	67,132	67,132
その他	324,506	136,936

当財団の助成について

（今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。）

京都大学教育研究振興財団助成事業のご支援により、当該の国際会議にとって重要な海外からの報告者数名の参加がかないました。おかげさまで充実した会議プログラムを滞りなく遂行することができました。この場を借りて御礼申し上げます。

成 果 の 概 要

教育学研究科・教育学講座
教授　鈴木　晶子

1.　会議の概要

国際会議「もう一つの知」に関する歴史人類学国際会議――現代における身体知・暗黙知・智恵の可能性（英語名：　International Conference Historical Anthropology - “The Another Knowledge” in the 21th Century）が、2017 年 2 月 18 日および 19 日の両日にわたって、京都大学教育学研究科において開催された。

本会議には、国内から 47 名、国外から 10 名の合計 57 名が参加し、シンポジウムにおける報告 10 件、ポスター発表 4 件が行われた他、本会議テーマに関するワークショップが催された。シンポジウム、ポスター・セッション、ワークショップのいずれも活況を呈し、最新の研究成果が披露されると同時に、その内容に関して活発な議論が展開された。

2. 会議開催の経緯

ヨーロッパ発の人類学を通して歴史・文化人類学の領域を切り拓いてきたベルリン自由大学のクリストフ・ヴルフ教授の研究は、教育学のみならず、哲学や芸術学など人文社会科学における学際的・国際的な研究展開を視野に収める研究者の間で 1990 年代から注目されている。今回の会議開催の責任者である鈴木晶子は、2003 年から国際フィールド調査をヴルフ教授と共同研究を続けており、日独それぞれの家庭や学校における幸福感比較や儀礼・パフォーマンス・ミメーシスの国際比較研究を行い、これまでに国際学会での発表はもとより、研究成果を公刊してきた（共編著通しては例えば、Suzuki, S. & Wulf, Chr.(eds.) (2007): "*Mimesis-Poiesis- Performa-tivity*", Waxmann, pp.1-216. Suzuki, S., Wulf Chr. u. anderen (2011): “*Glück der der Familie. Ethnographische Studien in Deutschland und Japan*”. VS Verlag für Sozial- wissenschaften, Wiesbaden, pp.1-308, 鈴木晶子・クリストフ・ヴルフ編（2013）『幸福の人類学』ナカニシヤ出版があり、また研究会議としては例えば Symposium “Happiness, Emotion, Language”: Toward an International Comparative Study” 2010 年 2 月 9 日 Kyoto University: The Global COE & The Free University of Berlin: Cluster “Languages of Emotion”が開催されている）。

以上の研究蓄積を踏まえ、理性や悟性に回収されてしまわない身体知や暗黙知など非認知的能力ともいえる「もう一つの知」に着目し、教育学、哲学、芸術学など学際的な観点から歴史・文化人類学的な思考のもつ可能性について研究討議を行うこととした。21 世紀を迎えた現在、科学の進展には目覚ましいものがあり、そのことによって認識の進歩とでも呼ぶべき状況がもたらされている。だが同時に、科学では解明しがたい事柄については、たとえそれが人間の生命や生活にとって重要であったとしても、考察の背景に退きがちであることが指摘される。本国際会議では、そのような現状診断に基づいて、歴史的人類学の知見を活かしつつ今日における学問の在り方を国際的および学際的な検討を通して追究することとした。

3.　本会議の意義および内容

人間とは何か、人間らしさとは何かをめぐる主題は、哲学だけでなく広く政治や経済、芸術な

どあらゆる人間の営みの根源を探る作業のなかで、常に問い返されてきた。動物と人間とはどのように異なるかをめぐる問い、人種や文化によって異なるその多様性を前にして、普遍的な人間モデルは提示できるのかという問いは、自然科学のみならず人文社会科学でも、社会の転換点で問題とされてきた。また、人工知能やロボットなど新しい技術の開発によって、社会構造が一変しようとしている昨今、人間の特性や使命について、新たに検討すべき事態が訪れようとしている。これまで人類の文明を創り上げてきた人間の知識や技術、技能、能力のあり方も問われている。

歴史人類学国際会議では、人類の未来について考えるために、理性や悟性だけに人間の知性を限定するのではなく、身体知や暗黙知、実践知の可能性に着目する。これまでの人間や人間性、知性をめぐる議論では十分に取り上げられないままにきているこのような「もう一つの知」に光を当てることにより、新たな時代を創るためのヴィジョンについて議論することとした。

国際会議はほぼ計画通りに開催することができた。国際会議プログラムは、大きく三つの部門で構成された。一つはシンポジウム部門である。2 月 18 日の午前中に「シンポジウム 1」を開催し、本会議における主要なテーマについて議論を行った。2 月 19 日には、午前中に「シンポジウム2」を、また午後から「シンポジウム3」を開催し、1 日目の議論を受けながらさらにそれを発展させた。二日間で、ドイツから 2 名（Christoph Wulf 教授、Alexander Wulf 教授）、ポルトガルから 1 名（Isabel Capeloa Gil 教授）、韓国（Kiseob Chung 教授、Minho Shon 教授）、そして日本から 5 名（鈴木晶子教授、山名淳准教授、広瀬悠三准教授、高松みどり准教授、高橋洋一助教）の報告者が登壇し、それぞれ人類学、哲学、芸術論、経営学、学習科学、教育哲学などの立場から「もう一つの知」に関する多様な研究成果が報告された。本会議における二つ目の構成要素は、2 月 18 日にの午後に開催されたワークショップ部門である。「「隙間」から「もう一つの知」へ」（英語名：From "Sukima" Toward "The Another Knowledge”）と題されたワークショップのなかで、清水美香氏（京都大学・特定准教授）が「隙間」をキーワードとして「もう一つの知」の可能性について論じた後、山口和也氏と森定道広氏による芸術パフォーマンスを鑑賞することを通して参加者が「もう一つの知」の可能性について主体的に議論しあうという試みがなされた。これにより、参加者が主体的に本テーマに関する考察を進めることができた。本会議における三番目の構成要素は、ポスター発表部門である。2 月 18 日、19 日ともに、昼食を兼ねたポスター・セッションを企画し、若手研究者を中心に自らの研究成果を披露する機会を提供した。和やかな雰囲気のなかでも有意義な議論がそこでも行われた。

本会議の成果は、ドイツ歴史人類学協会（Deutsche Gesellschaft für Historische Anthropologie）の機関誌 Paragrana- Internationale Zeitschrift für Historische Anthropologie の特集号「The Another Knowledge」として刊行される予定である。